中上級日本語学習者と母語話者の談話展開

ー会話進行に伴う情報要求表現に着目してー

吉田　睦

キーワード：情報要求表現、会話進行、談話展開、初対面会話

1. はじめに

日本語学習者が母語話者との会話を進める際、連続的な談話の中で会話を維持し、展開していくことは容易ではない。相手の発話を踏まえ談話を展開し合うというプロセスは、近年、日本語教育の現場においても指導項目化が試みられているが（中井・大場・土井,2004)、学習者が日本語母語話者との連続的な会話を維持する進行過程に着目した研究は限られており、更なる研究が求められている。

本稿では、会話の中で相手の情報を問う「情報要求表現」に着目し、初対面の中・上級日本語学習者と母語話者、および母語話者同士の談話展開を対象に、各会話進行の詳細を明らかにすることを目的とし事例研究を試みる。分析においては情報要求表現の下位機能として 4 つの「談話展開機能」を設定し、各機能の出現頻度と時間経過から会話進行の様相を明らかにしていく。

2. 情報要求表現の定義

質問の形を伴った情報要求表現は、相手が自分の求める情報を持っていると推測し、相手の反応を予測しながら用いられることから、発話機能の中でも話者の意図を含むとされている。そのため会話の進行上、談話展開の手段として使われることになり、談話における情報伝達を制御し、内容展開の積極的な方向付けをするものといえる。本稿では、談話内にみられる情報要求表現を『質問の形式を伴って相手話者に情報の提供を求めるための発話で、形態、発話のコンテクスト、音声のいずれかから情報を要求する発話』と定義する。

また情報要求表現は「質問ー応答連鎖」として談話内で発話権の移行や話題転換を導くとされ、実際の会話資料をもとに諸研究で取り上げられている。宇佐美・嶺田（1995)、三牧（1999）は母語話者同士の会話、中井（2002）は学習者と母語話者の会話を対象に質問表現の使用を考察しているが、いずれも短時間の会話資料にとどまり、会話を維持する状況で、その進行に着目した分析は行われていない。

このような質問の形式を伴う情報要求表現に着目しながら、談話を進行に沿って捉えた数少ない研究に、初対面状況（日本人同士、日本人対中国人、日本人対アメリカ人）にお

ける日本人の情報要求発話について、各文化圏の発話方略を異文化間コミュニケーション研究の立場から比較した佐々木（1998）や、一組の留学生とチューターの会話参加の様子を 50 ターンごとに細かく記述した岩田（2005）の研究が挙げられる。これらの研究によって日本語学習者と母語話者の会話進行の過程は明らかとなりつつあるが、日本語教育への応用へ向け、今後も更なる研究が必要とされる。

そこで本稿では、学習者の日本語能力の差異（中級・上級）を設定し、「情報要求表現」と「会話進行」の 2 つの観点から、事例研究としての詳細な分析を試みる。また中・上級日本語学習者と母語話者、および母語話者同士の会話を、会話の進行を追って比較し、情報要求表現の出現から各会話の特徴を明らかにすることを目指す。

3. 情報要求表現の談話展開機能

情報要求表現は、情報の交換を促し相手の情報を引き出す機能を持つことから、特に初対面会話において重要な発話となり頻繁に出現するとされている（佐々木,1998)。情報要求表現は、会話進行の中で情報伝達を制御し、内容展開の方向付けをするものとして、談話展開に関する「下位機能」を持つと考えることができる。例えば「お名前は何ですか？」という、応答内容が限られる単純な情報提供を求める質問に対し、「日本経済についてどう思いますか？」のように相手の意見を問い談話内容を深める質問は、より高度な認知活動や言語能力を伴う応答を必要とする。

これについて佐々木（1998）は、「情報要求」の発話に関し、フリード（Freed, 1994）の「質問」機能の分類を参考に、以下のような下位機能を提示している。

「情報要求」の発話の機能の分類（佐々木,1998）

(1)「確認」（相手のメッセージを理解するための要求）

A「二回ぐらいしか行ってない…」B「えっ　何がですか？」

(2)「自己明瞭化」（自分のメッセージを相手に理解し易くするための要求）

「日本は本州出たことないんです　実は…本州ってわかります？」

(3)「事実の情報」（相手や話題に関する事実の情報の要求）

「お名前は？何年生ですか？」

(4)「意見や感想」（相手の意見や感想の要求）

「日本の印象はどうですか？」

このような談話内に出現する情報要求表現の下位機能に対し、本稿では予備調査[1]を実施し、日本語教育としての観点から学習者の日本語能力の差に着目するため、非母語話者と

[1] 本稿では、日本語母語話者と学習者の両話者を分析の対象とするため、宇佐美（2006abc）の資料をもとに予備調査を行った。その結果、分類に該当しない機能が生じ、「同意・同調」を求める機能、「意味交渉」を求める機能を再設定した。

の会話における言語面と意識面の特徴の関連を述べた一二三（1999）、日本語母語話者と非母語話者のインターアクションにおける意味交渉について分析した村上（1997）の研究を参考に、談話展開機能として以下のように再分類[2]する。

情報要求表現の談話展開機能

(1)「同意・同調」を求める機能：文脈や内容面で相手に同意・同調を求める

NS02　結構、みんな合鍵つくっちゃう。

NS01　確かにね。

NS02　俺もなんか…。

NS01　そうかもしれないね。

NS02　みんな、（合鍵を）持ってるわけだよね？

NS01　あー、（部屋に）入ってくるかもしれない。

(2)「意味交渉」を求める機能：不明瞭な意味を確認するための相互交渉を求める

NNSI　私ね20歳…はたち、はたちのころね、フィリピンを旅行したことあるんですけど、

NS01　はい。

NNSI　そのとき、町のなかでね、スリ…？

NS01　うん、スリ。

NS01　あー、された？

NNSI　なんとういう、スリに…？

NS01　あった？

NS01　あいましたか？

NNSI　そう、スリにあった。

(3)「事実の情報」を求める機能：相手や話題に関する事実の情報を求める

NS08　あっ、お名前何っていうんですか？

NNS08　「NNS08の姓」といい…

NS08　「NNS08の姓」さん。

NNS08　はい。

(4)「意見や感想」を求める機能：相手の意見や感想を求める

NS01　じゃあ、このテーマで犯罪被害にあわないようにってあるんですけど、

NS01　どうしたらこういう犯罪にあわないように…どうすればいいでしょう？

NNSI　そうですね、あわないためにといえばね、犯罪はね、はっきりいう方法はないと思いますね。

---

[2] 分類の詳細は、筑波大学第二学群日本語・日本文化学類卒業論文（2006）「中上級日本語学習者と母語話者の談話管理―情報要求表現に着目して―」を参照されたい。

4. 調査

4.1 調査概要

分析の対象とした会話資料は、中級学習者[3]と母語話者、上級学習者[4]と母語話者、母語話者同士の会話の 3 組によるそれぞれ 1600 秒の初対面自由会話[5]である。談話展開の様子を詳細に追うため各会話の時間数を長く設定し、3会話の日本語母語話者を共通の1名として、同じ日本語母語話者（NS01）が 3 人の対話相手（NNSI,NNSM,NS02）と会話を行った。調査協力者はいずれも 20 代であり、属性は以下の通りである（表 1)。会話内容には「地域の防犯」というテーマを設け、自由に話をしてもらうよう指示をした。

【表 1】調査協力者の属性と組み合わせ

		話者	国籍	性別	所属
会話 1	母語話者　対　中級学習者	NS01	日本	女性	学生
		NNSI	韓国	女性	留学生
会話 2	母語話者　対　上級学習者	NS01	日本	女性	学生
		NNSM	韓国	女性	研究生
会話 3	母語話者同士	NS01	日本	女性	学生
		NS02	日本	男性	学生

4.2 分析方法と分析観点

会話資料は録音データに基づき文字化[6]を行った後、会話の進行（時間経過）に沿って 1600 秒の会話全体を 4 部分（各 400 秒）に区切り、発話数と談話展開機能の使用を集計しグラフ化した。発話の認定に関しては、1 話者によって「文」を成すと捉えられるものを 1 発話とし、発話が終了する以前に間や話者交替が見られた場合は、「文」が完結していなくても独立した 1 発話として扱った。また分析の観点を以下の 2 点に設定し、会話進行を捉えた全体からの考察と具体的な発話例から分析を示した考察を試みた。

(1)会話内で使用された情報要求表現を 4 つの談話展開機能別に比較し、各会話の特徴を分析する。

(2)会話内の談話展開機能が、会話進行（時間経過）に伴って推移している様子を捉え、

---

[3] 筑波大学留学生センターにて、調査時に日本語レベル 4 クラスを受講。日本語能力試験 2～3 級程度。

[4] 筑波大学留学生センターにて、調査時に日本語レベル 6 クラス（最上級クラス）を受講。日本語能力試験 1 級を取得済み。

[5] 調査は 2006 年 5 月に筑波大学内にて実施した。調査においては、親密度による影響を排除し、自然な形での情報要求を観察するため、初対面の話者関係を設定した。

[6] 文字化表記はザトラウスキー（1993）を参考に以下の記号凡例を用いた。

【記号凡例】

。	下降のイントネーションで文が終了することを示す
?	疑問符ではなく、上昇のイントネーションを示す
ー	音節が長く延ばされていることを示す
…	発話の省略、言い淀み
//	同時発話（//の後の発話が、次の発話と同時に発せられたことを示す）
{}	非言語行動

各会話の特徴を分析する。

5. 分析結果と考察

5.1 全体の傾向

まず各会話での情報要求表現の使用について考察する。各会話で用いられた「情報要求表現」の使用は、会話にみられた全発話を 100 として、中級学習者との会話で 20.1%、上級学習者との会話で 17.3%、母語話者同士の会話で 7.9%であった（両話者の発話を含む）。この結果、会話全体においては、母語話者同士の会話に比べ日本語学習者との会話場面の方が、情報要求表現を多く用いて会話を進行していることが明らかになった。

次に、各会話に現れた情報要求表現の発話数を双方の話者別に示すと、表 2 の通りとなる（%は両話者の情報要求表現の占有率を示す）。

【表 2】各話者の情報要求表現の発話数の比較

	固定母語話者 NS01	相手話者 NNSI,NNSM,NS02	計
会話 1 母語話者 対 中級学習者	61(75.3%)	20(24.7%)	81
会話 2 母語話者 対 上級学習者	45(51.7%)	42(48.3%)	87
会話 3 母語話者同士	30(47.6%)	33(52.4%)	63

中級学習者との会話（会話 1）においては、情報要求表現の使用が母語話者側からの発話（75.3%）に偏っていたのに対し、上級学習者との会話（会話 2）では、母語話者同士の会話（会話 3）と同様に、両話者からの情報要求表現の使用はほぼ等しい結果となった。

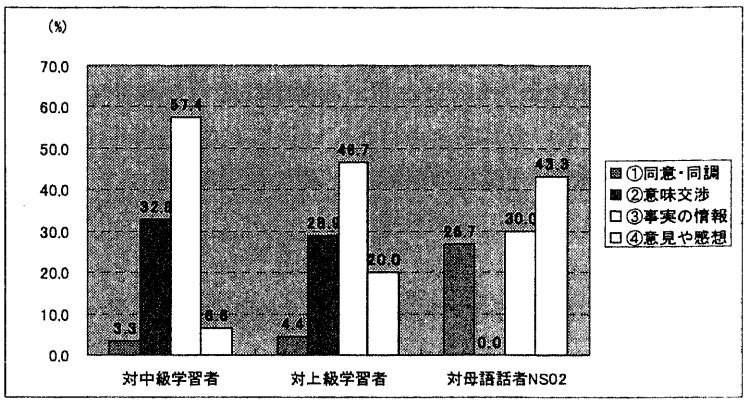
これに関し、日本語学習者と母語話者の会話を分析した志村（1989）も、母語話者との会話に比べ、学習者との会話には平常文よりも疑問文の使用頻度が高いという結果を示している。更にここでの分析結果から、同じ母語話者による会話においても、中級学習者に対しては 75.3%、上級学習者に対しては 51.7%と、日本語能力の違いにより情報要求表現の使用が異なっていることに注目できる。このように各会話における連続的な談話は、情報要求表現の発話数によって特徴づけられることが示された。

5.2 各会話における談話展開機能の運用

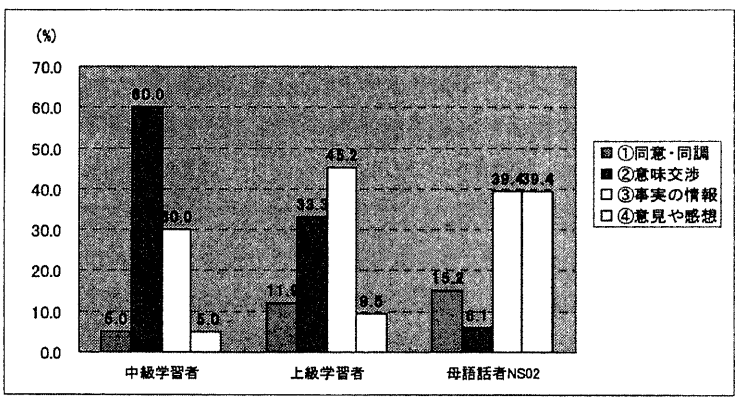
次に、情報要求表現を談話展開機能別に分類し、その様相から各会話の特徴を考察する。図 1,2 は会話内で使用された情報要求表現のうち、4 つの機能が使用された割合を話者別に示したものである。図 1 は同一の母語話者 NS01 が用いた談話展開機能であるが、相手話者によって各談話展開機能の出現が異なることがわかる。

また図 2 は、図 1 の母語話者 NS01 の相手話者（中級学習者 NNSI、上級学習者 NNSM、母語話者 NS02）が用いた談話展開機能である。両図に示された談話展開機能を比較すると、「同意・同調」を求める機能は、中級学習者との会話で 3.3%と 5.0%、上級学習者との会話

で 4.4%と 11.9%、母語話者同士の会話で 26.7%と 15.2%と段階的に増加し、その他の機能も日本語能力別に増減が見られる。また固定母語話者である NS01 の用いた機能は会話ごとに異なっており、相手話者の用いている談話展開機能と連動して使用が変化していることがわかる。



【図 1】母語話者 NS01 の情報要求表現の談話展開機能



【図 2】対話者 NNSI, NNSM, NS02 の情報要求表現の談話展開機能

これより各会話で用いられている情報要求表現を談話展開機能別に比較すると、使用頻度が特徴的に異なることが明らかになった。本資料からは事例的な考察となってしまうが、情報要求表現の発話に着目することで、従来、語彙や文法面では母語話者側からの調整が大きいと分析されていた談話も、情報要求表現の機能という観点では、対話者との相互的な関わりに応じながら会話が進行していたことがうかがえる。

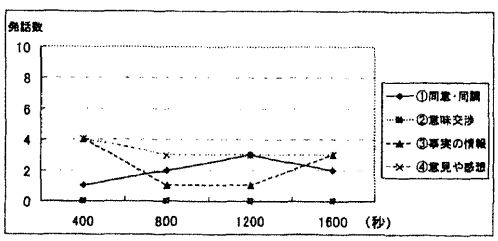
次節では、こうした談話展開機能が会話進行にどの様に関わっているのか、時間の経過を踏まえ考察を進めていく。

5.3 会話の進行に伴う談話展開機能の推移

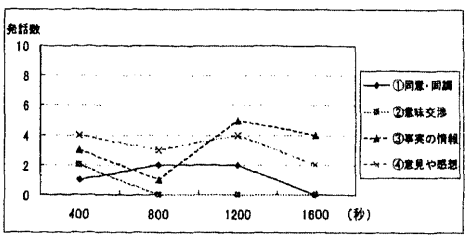
5.2 では各会話に出現した談話展開機能を機能別に比較しその特徴を捉えたが、本節ではこれらの談話展開機能が会話の進行に伴ってどの様に推移していくのか考察していく。

以下のグラフは会話進行に伴う談話展開機能の推移であり、母語話者 NS01 と中級学習者 NNSI、上級学習者 NNSM、母語話者 NS02 が用いた談話展開機能の推移を話者別に示している。分析においては 1600 秒の会話全体を 400 秒ごとに区分し、その時点までに使用された談話展開機能の発話数の合計をグラフ化した。これより同じ会話の中でも、進行に伴い情報要求表現の出現が異なること、また双方の話者が互いに連動して会話を構築していることが読み取れる。

まず母語話者同士の会話（図 3,4）においては、NS01,NS02 ともに会話開始部から「意見や感想」を求める機能を用いており、初対面の話者関係でありながら内容の深い会話のやりとりが行われたことが推察された。また学習者との会話での使用が少なく、母語話者同士の会話で多く使用された「同意・同調」を求める機能は、全体での発話数は少ないものの、会話が進行しても両話者に一定して用いられており、母語話者同士の会話に特徴的な機能であることがわかった。

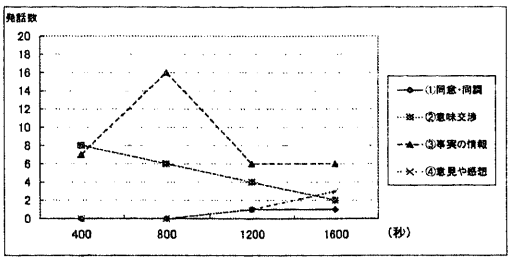


【図 3】会話進行に伴う母語話者 NS01 の談話展開機能の推移(対母語話者 NS02)

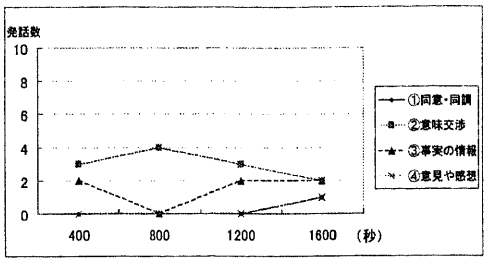


【図 4】会話進行に伴う母語話者 NS02 の談話展開機能の推移

また中級学習者と母語話者の会話（図 5,6）に関しては、母語話者同士の会話で「同意・同調」「意見や感想」を求める機能が顕著に現れたのに対し、「意味交渉」や「事実の情報」を求める情報要求表現が多く使用されていた。特に、図 3 の母語話者同士の会話の推移と図 5 の中級学習者との会話の推移を比較すると、同じ母語話者 NS01 による会話進行も、相手話者によって使用された談話展開機能が異なることが読み取れる。また中級学習者との会話で NS01,NNSI が使用した談話展開機能では、会話後半部になると「同意・同調」「意見や感想」を求める機能が僅かに現れ、徐々にではあるが会話進行に伴って使用する機能が推移していく様子が示された。

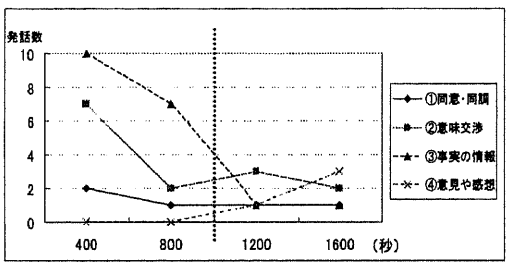


【図 5】会話進行に伴う母語話者 NS01 の談話展開機能の推移(対中級学習者)

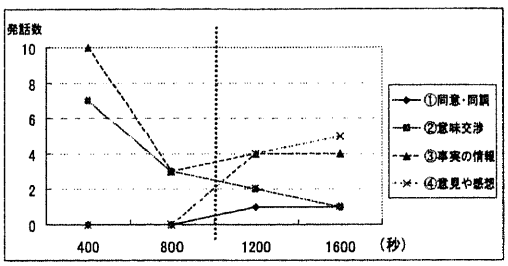


【図 6】 会話進行に伴う中級日本語学習者 NNSI の談話展開機能の推移

さらに上級学習者との会話（図 7,8）では、同じ会話内においても、進行に伴った変化が大きく見られた。ここでは会話進行の半ばを境に、前半部は「事実の情報」「意味交渉」を求める機能が多くみられた中級学習者との会話に共通する特徴が見られ、後半部には「同意・同調」「意見や感想」を求める機能が増加し、これらの機能が一定して出現していた、母語話者同士の会話に近づいていることが確認できる。前半の「事実の情報」の急激な減少、後半の「意見や感想」を問う発話が増加したという結果から、会話の開始時と終了時では両話者が使用した談話展開機能が大きく推移し、一つの会話内においても会話の進行によって談話展開機能の使用が変化していることが明らかになった。



【図 7】日本語母語話者 NS01 の会話進行に伴う談話展開機能の推移(対上級学習者)



【図 8】上級日本語学習者 NNSM の会話進行に伴う談話展開機能の推移

以上の結果より、各会話に特徴的であった談話展開機能の出現を表 3 にまとめて示す。情報要求表現の発話数および時間経過を追って考察することにより、日本語能力の異なる 3 会話の談話展開の実際をより多角的な観点で捉えることができる。

【表 3】各会話の会話進行と特徴

各会話	主な特徴
母語話者同士 同意・同調を求め話題を踏まえながら、内容的な展開を深める会話進行がみられる。	・両話者ともに情報要求表現の発話数が少ない。 ・「同意・同調」を求める機能が会話の全体にわたり一定して出現した。 ・初対面の間柄であるが、「意見や感想」を求める機能が会話開始時より出現した。

上級学習者 対 母語話者 会話が進行するにつれ、双方の話者ともに母語話者同士の会話の特徴に近づく。	・会話前半（特に開始時）において、「事実の情報」を求める機能が多用された。 ・中級学習者との会話に比べ、母語話者、学習者双方において、「同意・同調」、「意見や感想」を求める発話が増加した。
中級学習者 対 母語話者 母語話者が明確な情報要求を繰り返すことで会話が進行している。	・学習者からの情報要求表現の発話数が全体として少ない。 ・母語話者からの「事実の情報」を求める機能が多い。 ・学習者の用いた機能の約6割が「意味交渉」であった。 ・会話終了部では僅かであるが母語話者との会話の特徴に近づいた。

5.4 情報要求表現から見る特徴的な談話展開

前節では情報要求表現の発話数の違いから会話全体の特徴を示すことを試みたが、本節では具体的な会話資料をもとに、各会話の特徴的な談話展開を捉えていく。

5.4.1 母語話者同士の会話：同意・同調を求める会話進行

母語話者同士の会話においては、他の会話に比べ「同意・同調」を求める発話が一定して観察された。会話資料1はその例である。

【会話資料1】「同意・同調」を求める機能により展開する談話（会話半ば:800～1200秒）

発話番号	話者	発話内容
281	NS02	ま、ただ、そうだねー、そうゆうのは倫理的にみんなやりませんよね、っていうなんか暗黙の了解があるから鍵を換えたりしないのかも。
282	NS01	確かに、それ、あ、今、あー気づいた、あー、//そうかもしれない。
283	NS02	うん、だから…
284	NS01	でも中には絶対になんかそういう目的でやる人いますよね？
285	NS02	ま、いるかもしれないですね。
286	NS01	でも鍵換えない。
287	NS01	あ、あそっか、合鍵作っちゃうのか。
288	NS01	ほんとの鍵は一応返しますよね？
289	NS02	そうそうそうそう、で別に作った鍵は申請してくださいとは書いてあるけど、そんなにね、みんな厳密に申請していない//よね？
290	NS01	うーん。
291	NS02	特に内緒で同棲とかしてる人はね、もともと同棲しちゃいけないアパートだったりすると、その、合鍵作りました、とは言えないと思わない？
292	NS01	うん。

ここでは引越し先のアパートの鍵が前の住人のものと同じであるため防犯上危険だという内容を述べており、話題について互いが意見を述べる形で進行している。その際、発話番号284、288、289、291においてNS01、NS02の両話者はともに「同意・同調」を求める機能を用いて談話を展開している。このように母語話者同士の会話では、具体的で明確な答えを問う情報要求ではなく、自分の意見への同意を求め、相手の意見を踏まえながら話を進行する形をとる。289、291においては対話相手であるNS02も同様に「同意・同調」

を求める機能を用いながら進行しており、特に288、289では互いに連続して「同意・同調」を求め合っている。「同意・同調」を求める機能は、中・上級学習者との会話においても3.3%（中級学習者5.0%）、4.4%（上級学習者11.9%）の使用しか見られなかったことから、日本語母語話者同士の会話の大きな特徴とすることができる。

5.4.2 中級学習者と母語話者との会話：情報要求表現の多用

情報要求表現による質問の使用は、発話権を移行させ、積極的な談話展開につながるとされている（三牧,1999）。しかしコミュニケーション上の困難が多い中級学習者との会話では、情報要求表現が多用されているにも関わらず発話権の移行が円滑ではなく、母語話者は抽象的な質問を避け具体的な質問を繰り返す形で談話を進行させる様子がみられた。

以下の会話資料2は、中級学習者との会話で情報要求表現を連続して用いていた場面であり、母語話者NS01と中級学習者NNSIが自転車に関する話題を取り上げている。ここでは、発話番号38の情報要求表現に対し、中級学習者からの積極的な談話展開が見られず、発話番号41,43,45において母語話者が何度も情報要求表現を繰り返す形で談話が展開している。

【会話資料2】発話権移行後の談話進行（母語話者VS中級学習者、会話前半:開始～400秒）

発話番号	話者	発話内容
38	NS01	自転車盗まれたことありますか？
39	NNSI	私は自転車習ったことがないですからね。
40	NS01	あ、そうなんですか？
41	NS01	じゃ、今は？
42	NNSI	今は買いましたけど、まだ…{笑う}
43	NS01	あ、そうですか、じゃ、自転車はもういつも乗らなくて、乗らない？
44	NNSI	はい。
45	NS01	じゃ、ずっと歩きなんですか？
46	NNSI	はい。
47	NS01	健康的ですね。

一方、会話資料3の母語話者同士の例では、発話番号49の話題提示に対し、対話者が自らの経験を続けて述べていく様子がみられていた。このように母語話者同士の発話では、情報要求表現を受けた対話者が積極的に自らの経験や意見を述べて会話が進行する場合が多く、中級学習者との会話とは大きく異なっている。

【会話資料3】発話権移行後の談話進行（母語話者同士、会話前半:開始～400秒）

発話番号	話者	発話内容
49	NS02	えーと、NS01さんは防犯とか、こう特に気をつけてることはありますか？
50	NS01	うーん、そうですね、今あたしの家は、あの、同居してるんですよ。
51	NS02	はいはい。

52	NS01	女の子三人で//同居していて。
53	NS02	へー、すごいね。
54	NS01	で、それで、あのーやっぱりお互い防犯に対する意識がちょっと低すぎて、
55	NS02	あー。
56	NS01	家に帰っ…じゃなくて、朝起きてさぁ出かけようと思ったら、もう鍵が開いてたりとか。
57	NS02	えー、そうなんだ。
58	NS01	とかー、窓の鍵が閉まってなかったりとか、そうゆうことはよくあるんですね。

これに関し Long (1981) は、非母語話者との会話において母語話者は Wh-疑問文や二者選択の疑問表現を多く用い、少しの情報を短いやり取りで終えて、新たな疑問表現により非母語話者の会話への参加を促すと述べている。つまり会話資料 2 に見られる母語話者は、情報要求表現による発話権の移行後も、発話番号 41,43,45 に見られるような簡単な二者選択の質問表現を繰り返し用いて、確実なやり取りを進めながら、中級学習者 NNSI に発話の機会を積極的に設けていたと考えられる。母語話者同士の会話では、情報要求表現によって発話権が移行した後も談話が展開しており、中級者との会話場面と比較すると、両会話は異なる働きで情報要求表現を用い進行している。

5.4.3 上級学習者と母語話者との会話：意見や感想を求める会話進行

学習者との会話においては、後半部で中級学習者、上級学習者がともに「意見や感想」を求める機能を用い、談話の内容を深める傾向が見られる。会話資料 4,5 は、中級学習者、上級学習者との会話の後半部であり、母語話者が学習者の経験や考えを問いながら談話を展開している部分である。

会話資料 4 は上級学習者との会話であり、会話の後半になり母語話者 NS01 が上級学習者 NNSM に積極的に意見を求める場面である。発話番号 501 では電車に乗車した時の犯罪について母語話者が学習者に問いかけ、話題を展開している。上級学習者との会話では、母語話者同士の会話と比べ、発話番号 502,503 のように語彙を確認しながら進めるという特徴もみられるが、母語話者の問いかけに対し学習者は自分の経験を述べ、発話が連続している様子がわかる。

【会話資料 4】母語話者と上級学習者の会話で意見や感想を求めている談話（会話後半:1200～1600 秒）

発話番号	話者	発話内容
501	NS01	うん、日本にきてなんか危なかったこととかありますか？
502	NNSM	うーん危なかったことはなかったですけど、なんか夜に乗って、なんかよっぱれたおじ…
503	NS01	酔っ払いの？
504	NNSM	酔っ払いが、なんか若い女性に近づいてなんか文句言われたり、あ、

		言ったり、それは見たことありますね。
505	NS01	え一、なんか（NNSMの居住地）住んでて、危なかったこととかありますか、他に？
506	NNSM	私は…
507	NS01	特に？
508	NNSM	もうバイトおわったら、まあ11時とか12時すぎる日もありますけど。

一方、中級学習者との会話では、上級学習者との会話と比較すると学習者自らが会話を進行することが難しい。会話資料 5 は中級学習者との会話の後半部分で意見や感想を求める機能が現れた場面であり、母語話者 NS01 が学習者 NNSI に、居住地付近の安全対策について意見を求めている部分である。ここでは発話番号 372,374 の問いかけに対し会話が上手く展開せず、379,380,381 では母語話者の問いかけを何度も繰り返し、最終的に母語話者が自ら意見を提示する結果となった。

【会話資料 5】母語話者と中級学習者の会話で意見や感想を求めている談話（会話後半:1200～1600 秒）

発話番号	話者	発話内容
372	NS01	まあ、あの辺に例えば街灯を増やすとか、
373	NNSI	うん。
374	NS01	そういう、対策も必要だと思うんですけど、どう思いますか？
375	NNSI	え一。{笑い}
376	NS01	じゃあ、今住んでる（NNSI の居住地）が、なんか、危ない地域にならないために、
377	NNSI	うん。
378	NS01	どうすればいいでしょうかね？
379	NNSI	そうですね、どうすればいいかな…
380	NNSI	え一、どうすればいいですか？
381	NS01	どうすればいいですかね？
382	NS01	やっぱり、暗いのは、問題ですよね//それは。
383	NNSI	うん。
384	NS01	やっぱ、向こうの方すごい、木とか、木が多いじゃないですか。
385	NNSI	多い、そうですね。
386	NS01	うん。

情報要求表現の中で「意見や感想」を求める機能は、相手話者の持っている意見、あるいは話題に関する感想や評価などを引き出す表現である。この機能は相手への働きかけの点で要求内容に話者の主観や意図が含まれ、相手話者に意見を問うため認知的に高度な発話を要する。そのため中級学習者との会話では、「意見や感想」を求める場面で、会話の維持が困難となったことが予想される。

また会話資料 4,5 を比較すると、同じ母語話者 NS01 の談話展開が、相手学習者によって異なることがわかる。これに関し李（1995）は、日本語母語話者が行う会話管理として「関連情報の添加」を挙げている。日本語母語話者同士の会話においては、母語話者は他の会

話参加者からの働きかけに対し、「質問⇔応答＋関連情報」という表現方法で応じ、応答として求められた以上の関連情報の提供を行い談話が展開していく。したがって学習者との会話において情報要求表現を用いるときも、質問している母語話者は、本来「質問⇔応答＋関連情報」という情報提供を期待しているといえる。しかし中級学習者との会話では、特に相手からの関連情報の添付が少なく、その結果、明確な情報要求表現を多用しながら、また自ら情報を補いながら会話を維持しようと試みたと考えられる。

6. まとめと今後の課題

本稿では日本語学習者と母語話者の会話進行を明らかにするため、母語話者を固定した3会話を対象に、情報要求表現に焦点をあて分析を試みた。従来の研究よりも比較的長時間の会話資料を分析することで談話展開機能の推移を捉え、事例的ではあるが各会話がどのように進行しているのかを記述することができた。これらの特徴は、学習者が習得した日本語表現、母語話者との接触回数など多くの要因を反映していると思われるが、今後、日本語学習者が会話を進行、維持していくための要素の一つとして、情報要求表現の更なる研究が必要であると考えられる。

また本稿では、先行研究では明らかにされていなかった日本語能力の差異を設定し、双方の話者からの分析を試みたことで、会話を維持する場面を日本語能力別に捉え、それぞれの会話で両話者が相互的に談話を進行している様相が確かめられた。本稿では談話展開の移り変わりをより詳しく分析するため 3 組の会話を追う形となったが、今後は更に多くのデータをもとに検証を進めて様々な談話展開を分析し、実際の授業や会話練習への応用を目指していくことが望まれる。

また先行研究においては、談話内における質問表現が話題を展開していく上で重要な役割を持つことが明らかにされている。質問表現を伴って話題を開始・選択して展開した場合、その発話は実質的に会話の主導に関わる発話となる（三牧,1999 中井,2003)。本稿では会話が進行する様相の全体像と特徴的な談話進行を捉えることに焦点を当ててきたが、今後は対象データをより詳しく分析し、質問表現とそれに隣接した応答にも着目したい。また先行研究には長時間の談話データによる分析が少ないため、今回の会話資料を活かし、発話権や話題管理の移り変わりについても更なる比較・分析を行っていきたいと思う。

【参考文献】

岩田夏穂(2005)「日本語学習者と母語話者の会話参加における変化―非対称的参加から対称的参加へ―」『世界の日本語教育』No.15, 135-151.

宇佐美まゆみ(2006a)「宇佐美まゆみ研究室談話コーパス 日本語母語話者同士の会話（社会人、初対面の雑談)」2006.06.25, Web Page : www.tufs.ac.jp/ts/personal/usamiken/shotaimenJapanese.htm

宇佐美まゆみ(2006b)「宇佐美まゆみ研究室談話コーパス 日本語母語話者と学習者（韓国人）の

会話（初対面の雑談）」2006.06.25, Web Page：www.tufs.ac.jp/ts/personal/usamiken/NS-NNS.htm

宇佐美まゆみ(2006c)「談話コーパス BTSJ による多言語話し言葉コーパス 日本語会話 2（日本人と学習者の会話）サンプル 2　韓国人学習者（中級）と日本人、初対面の会話」2006.06.25, Web Page：www.coelang.tufs.ac.jp/publications/corpora/sample2.pdf

宇佐美まゆみ・嶺田明美(1995)「対話相手に応じた話題導入の仕方とその展開パターン―初対面二者間の会話分析より―」『名古屋学院大学日本語学・日本語教育論集』No.2, 130-145.

佐々木由美(1998)「初対面の状況における日本人の「情報要求」の発話　同文化内および異文化コミュニケーションの場面」『異文化間教育』No.12, 110-127.

志村明彦(1989)「日本語の Foreigner Talk と日本語教育」『日本語教育』No.68, 204-215.

中井陽子(2002)「初対面母語話者／非母語話者による日本語会話の話題開始部で用いられる疑問表現と会話の理解・印象関係ーフォローアップ・インタビューをもとにー」『群馬大学留学生センター紀要』No.2, 23-38.

中井陽子(2003)「話題開始部で用いられる質問表現―日本語母語話者同士および母語話者/非母語話者による会話をもとに」『早稲田大学日本語教育研究』No.2, 37-54.

中井陽子,大場美和子,土井眞美(2004)「談話レベルでの会話教育における指導項目の提案:談話・会話分析的アプローチの観点から見た談話技能の項目」『世界の日本語教育』,No.14, 75-91.

一二三朋子(1999)「非母語話者との会話における母語話者の言語面と意識面との特徴及び両者の関連―日本語ボランティア教師の場合―」『教育心理学研究』No.47, 80-90.

ポリー・ザトラウスキー(1993)『日本語の談話の構造分析　勧誘のストラテジーの考察』くろしお出版.

三牧陽子(1999)「初対面インターアクションにみる情報交換の対称性と非対称性　異学年大学生間の会話の分析」『日本語の地平線 吉田彌壽夫先生古稀記念論集』, pp.363-376,くろしお出版.

村上かおり(1997)「日本語母語話者の「意味交渉」に非母語話者との接触経験が及ぼす影響―母語話者と非母語話者とのインターアクションにおいて―」『世界の日本語教育』,No.7, 137-155.

李麗燕(1995)「日本語母語話者の会話管理に関する一考察―日本語教育の視点から―」『日本語教育』No.87, 12-24.

吉田睦(2006) 筑波大学第二学群日本語・日本文化学類卒業論文「中上級日本語学習者と母語話者の談話管理―情報要求表現に着目して―」

Freed, Alice F. (1994) The Form and Function of Questions in Informal Dyadic Conversation. *Journal of Pragmatics*, No.21, 621-644.

Long, Michael H. (1981) Questions in foreigner talk discourse. *Language learning* No.31:1, 135-157.